

キューポランド・ *Cupoland children* チルドレン

鈴木正興

Suzuki Masaoki



著者プロフィール

鈴木 正興 (すずき まさおき)

昭和18年生まれ。

昭和41年、早稲田大学第一文学部東洋史科卒業。

以後、公立高校の教員、家業の不動産屋、街の個人学習塾、建設現場の作業員、中学校の校務員等の職業を履歴。

日本音楽著作権協会（出）許諾第0115454-101号

キューポランド・チルドレン

2002年2月15日 初版第1刷発行

著者 鈴木 正興

発行者 瓜谷 綱延

発行所 株式会社 文芸社

〒112-0004 東京都文京区後楽2-23-12

電話 03-3814-1177 (代表)

03-3814-2455 (営業)

振替 00190-8-728265

印刷所 株式会社 平河工業社

©Masaoki Suzuki 2002 Printed in Japan

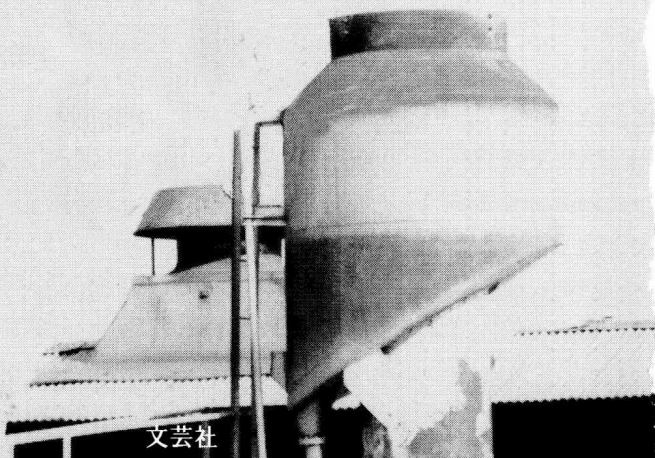
乱丁・落丁本はお取り替えいたします。

ISBN4-8355-3348-8 C0095

キューポランド・ *Cupoland children* チルドレン

鈴木正興

Suzuki Masao



●目次●

第一部 昭和どまんなか街風景

一、	トンネルくぐって昭和の街へ	6
二、	川を渡ればキューポランド	12
三、	さすが駅前ちよつくら賑やか	20
四、	何でもあるぜ街の闇市にや	29
五、	哀歓こもごも駅前ブルース	38
六、	したたかなるかな駅前長屋	46
七、	これでも一応商店街だぜ	57
八、	こっちはダメだがあつちはスゲーぞ	67
九、	鋳物の街だぜ煙塵全開よ	75
十、	ここぞとばかり聖域に闖入だい	85
十一、	モノクロトーンさ、鋳物の街は	97
十二、	情報はとにもかくにも共有財産	104

第二部 子供まちなか遊風景

一、	子供の天下だハラッパ空間は	116
二、	遊びはいつも群れ集まって	129
三、	遊び道具は自前で作れ	142
四、	アズユーライクだ狩獵採集	153
五、	街は泥水の海原と化しちまった	162
六、	耳でも見えるぜ街風景は	171
七、	向こっかしは文化の地だぜ	182
八、	歌も言葉も世につれ人につれ	198
九、	涙を啜ってベীগマ三昧	209
十、	メンコの妙味は駆引の如何だ	215
十一、	奥が深いよビーターダマの世界	222
十二、	野球、野球でまた日が暮れる	231

第一部

昭和どまんなか街風景

一、トンネルくぐって昭和の街へ

今、この駅の西口は爽やかな風に公園の緑も清々しく、見上げればそれを前景にして背の高い商業ビルやマンションが並び立ち、中にも市立総合文化センターのあたかも超近代的ゴシック建築かとも見紛う建物は、一頭地を抜き巍峨としてそそり立っている。そのガラス張りの壁面は青い空や白い雲まで映し出し、傲然と天をも己の所有に帰せしめているかのよう。

今日でこそ見慣れたが、出来た当初は、

「あつたく、ぶったまげたもんがにょきつと建ちやがったぜ」

と誰しもが目をしばたたき、口を開けっぱなしにして見上げていたものである。

これらの建物群や瀟洒な公園は、駅西口再開発計画によって平成の初めに世の中に出現したものであり、またそれに前後してこの街一帯は鋳物工場の跡地に雨後の筍の如くマンションが簇生しており、現在もその趨勢は止まることを知らない。こうして木造の住宅やアパートと工場が犇めき合っていた言わば平面的なかつての街風景は、突兀たる高層建物群によって駆逐され、様相はまるで一変してしまったのである。言い換えれば、紛々錯雑たる昭和の時代が、えげつない過剰消費社会のブルトナーザーで根こそぎにされ、見てくれ

は明るく爽やかな新時代に取って代わられてしまったのだ。

まあ、それは致し方あるまい。

とは言うものの、確かに昭和という時代の風景や人々の日常がこの地上から消されてしまったとはいえ、その当時を生きていた人々の記憶まではブルト^{さくら}ーザーといえども浚^{さら}ってしまうわけにはいくまい。

現在林立しているビルやマンションの名称を見ると、殆ど皆何とも国籍不明のカタカナ名ばかり。それに象徴されるように人々の生活や人間関係も小綺麗だが、それだけにややもすると人畜無害で何ぞ取り澄ましたものになりがちになる。人々の生活が、或いは人間同士の関係が発する一種の臭気といったものがどうしても稀薄なのである。個人や個人の生活が後生大事に最優先される時代になったのだから当然だと言われれば返す言葉もないが。

うん、なるほどそうか、現在は能うる限り臭気を発しないというのが言わば時代の趨勢になっているのか。人々は限りなく無臭に近い存在でありたい、互いの関係もそうでありたいと願っているのか。

だが待てよ、考えてみればそれも臭い話ではないか。

生活臭のない生活なんてどこにあるというのだ。人は生きている時はもちろんのこと、

死んだ時だってしつかり死臭を發して自己を主張するし、臭いは一生付いて離れないものだ。大体からして臭くないウンコなんてウンコの風上にも置けないではないか。

と言うことはつまり、能うる限り臭氣を發しないようにしていると言うより、芳香剤か何ぞで能うる限り臭氣の發散を糊塗しようとしていると言ひ直した方がいいのかな。世の中や個人の生活の相對的安定とその剰余価値としての時間的經濟的余裕が、そのような志向を生み出したのかもしれない。過剰消費社会の所産というわけだ。因みにスーパへ行けば、どうぞどうぞと芳香剤や消臭剤が山積みだものな。

だとすれば、スーパもなく、また安定や余裕といったものに、とてもじゃない、全く手が届かなかった昭和中期の時代、具体的には昭和二、三十年代は件の臭氣を糊塗すべき氣持も術も当然なかったのだから、世の中臭氣^{ぶんき}芬々たるものがあつたということになるが、さでどうなんだ。

いやごもつとも、果してその通りなのである。齷齪^{あくせく}した日常の生活臭、「向こう三軒両隣」的な相互交通が頻繁な地域臭、ハラッパで群れ遊ぶ子供らの汗臭さ、そこらのオッサンの焼酎臭い管巻き声、軒端でオバサンが七厘をパタパタ扇ぎながら焼くサンマの煙、野良犬御用達の木製電信柱、文字通りドブ臭いドブ川、便所は古來伝統のポットン汲み取り式、かてて加えてこの土地ならば鑄物工場特有の煤煙や塵埃が漂つて空氣さえ臭い。

そのくせこの住民はそんなあらゆる種類の臭さに馴致じゅんちしていて、まあ一向に気にするでもない。むしろ当り前のことだとさえ思っているふう。いくら「臭い物には蓋」とは言ったって、まさか空気に蓋をするわけにはいくまいし、馴れれば煤臭い空気だってへっちゃらなのだ。

というわけで、物は試し、その煤臭い空気を吸いに行ってみようではないか。

一体この街が昭和の時代、どういう街だったのか、どのような臭いを漂わす風景であったのか、そしてそこに生きる人々、とりわけ子供らがいかなる臭さを発散させながら日々を過ごしていたのか、ここはひとつ時代を遡って昭和二、三十年代の鑄物の街に舞い戻ってみようではないか。

平成の現在から昭和の時代へ遡行する手掛かりは、はてさてどこにしようかと少しく迷ったが、おっと、うっかりしていた、格好の場所があったではないか。

件の総合文化センターの麓にある駅前交番脇の側壁に、「公害資源研究所跡地」と記名され、その建物のレリーフが浮き彫りにされている円いプレートが掛かっている。このプレートは、つまりこちら一帯が昭和の時代、公害資源研究所の敷地であり、その施設が筑波研究学園都市に移転したその広大な跡地が再開発されて、現在見られるような姿になったその顕彰碑なのである。この通産省の研究機関は創建時は「燃料研究所」という名称だ

ったので、周辺住民は「燃研」と通称し、その後御上の都合で何回か名称が変わったにもかかわらず、住民の方は相変わらず「燃研」と呼び、言わば西口駅前シンボルとして馴れ親しんでいたものだが、さればこそその燃研の顕彰プレートは直径二メートルほどの円い枠こそ昭和へのタイムトンネルの入口に相応しいと踏んだわけだ。

一応辺りを窺って誰も見ていないのを確認して、やおら側壁を攀じ登ってプレートに取り付き、逸る^{はや}氣持を鎮めつつ、徐に円い枠の中に足を踏み入れる。

中は真暗で足元は覚束ず懐中電灯だけが頼りだ。どうやら人ひとりだけが歩けるような狭隘^{きようあい}な径らしい。しかもでこぼこしている。天井からはポタリと冷たい雫が首筋に落ちてくる。それでも愛用のトレッキングシューズは秩父の山や八ヶ岳の登山道と同様に、この隘路でもしつかり地面を捉えて歩行を捗^{はかど}らせてくれる。音といえはその靴音と雫の滴る音ともうひとつ、ワサワサという蝙蝠どもの羽音とさんざめきだけだ。

どれぐらい歩んだろうか、ふと氣がつくと雫や蝙蝠どもの音は消えて靴音だけとなり、その靴音も響きが小さくなったよう。もしかしたら……

径はやや広がり、やがて豁然^{かつぜん}として開け、思う間もなくひよっこり飛び出たのは目論み通り昭和二、三十年代のこの街の西口駅前であった。

羈鳥^{きちよう}が旧林に帰り、池魚^{ちぎよ}が故淵^{こえん}に還ったような面持で見渡せば、一万七、八千坪にも亘

る広大な駅前、地面を件の燃研が悠揚迫らず占拠している。馴染みのこの施設のシンボル時計台も健在だ。途中で止まったまま頑として動こうとしなかった気難し屋のあの時計台である。燃研の周縁には木造の家々がびっしりと密集し、更にその間のあちこちに挟まった鑄物工場や機械工場からは仕事の音が騒々しく響き、煤煙は辺り構わず漂い、独特の臭いが鼻をついてくる。この音、この臭い、この空気、紛れもない、あの頃のこの街だ。

タイムトンネルを入る前の風景は色彩は小綺麗でも、何か乙に澄ましたよそよそしい感じが否めなかったが、今日の当たりにしている風景はザワザワした猥雑さに溢れ、昭和人の五官にはしっくり感応するというものだ。この風景にはしたたかな臭気はあっても色彩はない。言わばモノクロームの世界である。所謂高度経済成長期以前における街世界の基本色調は、このように映画や写真で言うモノクロームなのである。いや、その時代自体が綺麗な色彩を施す余裕もなければこそ、ただ白と黒との濃淡だけで織り成す世界であったと言えよいだろうか。

燃研の東側すなわち駅に面した側には、ヤモリのようにその塀にへばりついて棟続きの平屋が、形だけのロータリーを挟んで線路際にも、これまた一続きの家並みが平行し、双方合わせて名ばかりの駅前商店街を形成している。舗装の施されていない道路は、たった今夕立が通り過ぎた証拠にあちこちに水溜りを拵え、^{こしら}え、通行人の直進を阻んでいる。ロータ

リーでは雨で中断していた三角ベース野球が再開されたらしく、黄色い喚声が飛び交う。やがて間延びしたような豆腐屋のラッパにつられるように燃研の終業サイレンが鳴り始める。それに相前後して方々の工場のサイレンもこれに和し、この街はどこも夕方の五時を迎える。

ああ、やっと時空を遡って昭和半ばの時代に、そして取りも直さずその時代のこの街に還ってきたのだという実感が湧いて出てくる。

ここはまず、今またエラーをしでかして頭を掻いているイガグリ頭の少年に連帯の挨拶を送っておこう。それからもちろん、今五時だというのにやっぱ八時二十分の姿勢を頑として取り続けている燃研の時計台に、「ただいま！」の挨拶をしておこうか。

二、川を渡ればキューポランド

東京方面からは国電の京浜東北線がこの街へ導いてくれる。

この京浜東北線の線路は、東京の北端たる赤羽駅を発車して暫くすると、東京都と埼玉県を画する荒川の鉄橋に差しかかるが、その手前百メートルほどの所でそれこそガックンとカーブしている。都内でも一ヶ所ぐらいはこれが急カーブというものだと乗客に知らしめる所があったといいと、国鉄当局が思っていたかどうかは与り知らないが、ともかく

電車はそれはもう露骨にガックンとなり、一瞬ミシッと軋むのだ。乗り慣れている通勤通学者なら、ここでもうなることは先刻承知だから吊革をしつかり掴むなり、足を踏ん張りなどして周到に構えるからいいようなものの、たまに乗った人はそんなこと御存知ない。ガックンと同時にオヨヨヨとよろめいたり、悪くすると体を振られてあらぬ方向にずつこけたりし、まあ、いいように遠心力の餌食となる。

このガックンカーブが既述したように国鉄当局の思い付き的策謀によるものなのか、それとも物理学者と心理学者が共謀して、遠心力の人体に及ぼす力学的効果と心理的影響の相関関係を試す実験場としたいためのものだったのか、はたまた、これが一番信憑性があると思われる「もうこの地点で東京はおしまいで、ここから先は埼玉だ、だから皆気を付けろよ！」というサインだとの説等々、まあ諸説紛々といったところだが、いずれにせよこれだけ素人論壇を沸かす「ただ単なるカーブ」も珍しい。

それはさておき、この地点でほぼ真北に向きを変えつつ体勢を立て直した電車は、忽ちのうちに八百メートルもある荒川鉄橋に差しかかるや、鞭一閃、直線大外一気の勢いでその八百メートルを突っ走る。都内は駅と駅との間が短く、それなりにおとなしく走っていた電車の自制心も、ここでは一気にながぐり捨てられ、拘束されているのは足元のレールだけ、あとは委細構わず、意気軒昂に風を切り、唸りを上げ、我が道を突っ走る。

さて車窓から右顧すれば、国道一二二号の新荒川大橋がこちらの鉄橋と平行に走り、その向こうには岩淵水門が見える。水はそこから右すれば隅田川となり、左すれば荒川本流（放水路）となる。また頭を廻らせて左眊すれば、左岸にレンガ造りの通称「赤水門」や、橋梁が富士山型の国道一七号戸田橋が招呼の間。その左ずうつと奥に本物の富士山が白銀を載いて空に浮かび、その右手へ多摩から秩父にかけての山並みがたおやかに霞んでいる。川の流域の空は広く大きい。堤防の外はどちらも建物が集集し、街は空を狭めている。川を中心として両側の堤防に挟まれた空間だけは、橋以外いかなる遮蔽物もなく、空はもう底抜けに広大だ。河川敷のそんな開放性も更に電車に解放感を与え、向こう所敵なしのスピードを出させるのだらう。

一分足らずで埼玉側の堤防に達すれば、またカーブが待っているが、先程のものとは異なり長半径のゆったりとした弧なので、鉄橋での余勢を駆ったスピードはさして落ちないし、ガクンすることもない。それに第一、もう埼玉なのだから何のお構いも要らないというわけだし。

車窓から再び外を眺めると、東京とは俄然違った風景が連なっている。左右どちら側にも街工場が重なり合うようにして聳いているではないか。それも鋳物工場が多い。

それらの工場の屋根上や横っ腹には、「長谷川鋳工所」とか「島崎鉄工所」とかの名前

が看板やペンキで大書されていて、厭でも目に入ってくる。会社名ではなく製品名を宣伝しているものも少なくない。鑄鉄管や砲金などはわかるとして、「ダグタイル」とか「チルドロール」のようなカタカナ製品となると一般人にはとんとわからない。それから、これは漢字なのに一体どんな製品なのか理解に苦しむものもある。「雰囲気」という製品だ。雰囲気という漢字が醸し出す工業製品としては何ぞ不分明な雰囲気が、製品の正体の何たるかをばやかしているようで、何となく雰囲気的にはわかるのだが、結局はつきりしたことはわからないのだ。とはいえこの看板、鑄物の街の雰囲気作りに一役買っていることは変りはない。

ところで、あっちにも鑄物工場が、こっちにも鑄物工場があるとわかるのは、それらの工場には必ずキューポラがあるからである。キューポラは言わば鑄物工場のシンボルと言えようか。キューポラとは銑鉄を溶解する炉のことで、その先端は大きな煙突よろしく屋根の上に稜立^{ちま}っている。そうしたキューポラの林立は、まさしくこの街がキューポラの街、言い換えれば「キューポランド」であることを示してくれているというわけだ。殊に夜ならば、ふき（鉄を溶解する作業）をやっている工場のキューポラが吐き出す炎と火の粉と光彩は、辺りに映え、更にその感を深くさせてくれよう。

また、昼間だって、キューポラを戴いた街工場の群れの鉄錆び色を基調とするくすんだ